

2026年1月4日

説教「この希望は失望に終わらない」

ローマ人への手紙 5章 1～5節

2026年の新年礼拝です。新しい年を迎えた最初の主日に、この年の御言葉をローマ人への手紙5章から学んでいきましょう。

1. 恵みの信仰によって生きる (1～2節)

① 義と認められた者達 (1) 「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、」

ローマ人への手紙は使徒パウロによるもので、「救済論」が語られています。福音のなかには神の義が啓示されている(1:17)と述べたパウロは、3章に至って「義人はいないひとりもない」という詩篇を引用しながら、「すべての人は、罪を犯した」(3:23)と明言します。その上で「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、働なしに義と認められるのです」(3:24)という福音が伝えられるのです。そして、「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰による」(3:28)と述べて、救いは信仰によると論じたのです。4章には信仰者のことが述べられ、5章1節はそれに基づいて「信仰によって義と認められた私たちは」と述べるのです。

② 神との平和 (1) 「私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」

義と認められ信仰者がどのようにされているかが確認されます。すなわち、その者たちには主イエス・キリストが介在してくださって、神との平和が与えられているというのです。神との関係が不調和となっていた人間に、キリストの十字架の死の贖いを信ずる者が救われていくという福音はその人に、まことの平和が訪れるのです。

③ 恵みの信仰 (2) 「またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みの信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」

キリストによる恵みの信仰に導かれ者たちは、何を望んでいるかといえば、神の栄光だというのです。パウロは人間に栄光は帰すことを否定し、ただ神の栄光を望んだのです。そして、そこにこそ地にある平和があることを信じ(ルカ 2:14 参照)、それを喜んだのです。

2. 患難、忍耐、練られた品性、希望 (3～4節)

① 患難さえも (3) 「そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し」

しかし現実には患難があるのです。苦しい時にも、神の栄光を望めるかという課題があります。これに対し、パウロは患難さえ喜んでいきますと述べます。というのは、患難は確かに難しいことではあるのですが、そ

れによって、忍耐が生み出されるというのです。この忍耐は人間の頑張りといったものではなく、御霊なる神の賜物です。「すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます」(Iコリント13:7)とありますが、愛の具体的姿こそが患難から生まれる忍耐なのでした。

②練られた品性 (4) 「忍耐が練られた品性を生み出し」

さらにその忍耐は練られた品性を生み出すとあります。「練られた品性」は「練達」と口語訳などで訳されます。それは、火を通し鍛錬した名刀のようなイメージです。それは美しくもあり、実際的でもあるのです。私たちがうちに、名刀のような品性を主にある忍耐はもたらすというのです。

③希望を生み出す (4) 「練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」

鍛え抜かれた刀のような、主からの品性は希望を生み出すと言います。この希望こそが、パウロはクリスチャンが求めるべきものであることを伝えようとしているのです。「いつまでも残るものは、信仰と希望と愛です」(Iコリント13:13)とある通りです。

3. 失望に終わらない希望 (5節)

①失望に終わらない希望 (5) 「この希望は失望に終わることがありません。」

この希望は、究極的な希望です。救われた者が求めている希望です。永遠の希望です。生起する出来事に左右されない希望です。「希望は私たちを欺くことはありません」(新共同訳)とあります。また「その希望は恥をかかせません」とも訳されます。本当の希望ですから、それは失望させるものではないのです。

②聖霊によって (5) 「なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、」

「希望が失望に終わることのない」理由が述べられます。そして、それは聖霊によってこそもたらされるというのです。人間からもたらされるものであるならば、それは一時的であり、脆弱です。聖霊なる神だけがもたらさる希望こそ、救われた者に与えられるもので、それを救われた者は求めていくのです。

③神の愛が (5) 「神の愛が私たちの心に注がれているからです。」

それでは聖霊によってもたらされるものとは何かといえば、それは「神の愛」です。アガペーです。犠牲的な愛、打算を考えない愛、無償の愛、見返りを求めない愛、人が思いつかない愛。神が御子イエス・キリストを送ってくださった愛はまさにその愛です。そして、御子イエス・キリストが十字架に至るまで、地上で現わして下さったのはその愛です。その愛が聖霊によって、私たちの心に注がれているというのです。この神の愛が、揺るがない希望もたらすのです。

《展開と結論》

2026年の新年礼拝。

今朝は姉ヶ崎キリスト教会の今年の御言葉についてももう少し考えていきます。「この希望は失望に終わることがありません」。

3~4節は口語訳では「患難、忍耐、練達、希望」と覚えやすかったのですが、新改訳では「練られた品性」となったために、リズムがとれなくなってしまいました。それはそれとして、患難は真の希望につながるのだと知れば、私たちの人生への関わりかたは大分変わってくるのではないのでしょうか。なぜなら、私たちの人生は患難や苦難や試練だらけだからです。それらは、悩みや痛み、疲れが伴うのです。しかし、御霊の助けをいただいて、患難に耐えさせていただければ、練られた品性へとつながっていくのです。創世記に出てくるヨセフは素直な信仰深い青年で父親から愛されていました。しかし、兄達から疎まれ、売られてエジプトで生きることになりました。一生懸命に働いて主人からとりたてられたのです。ところが、主人の妻の思うままにならなかったことから、牢獄に入れられてしまいました。とはいえ、そこで出会った元パロの側近にしたのと同じように、後にパロの夢の解き明かしをしたことからとりたてられて総理大臣に抜擢されました。ヨセフの人生は大きな患難がありましたが、その時ごとに神から取り扱われて忍耐と練られた品性を増し加えられていたことが覗えます。また、主が与える希望を失わずに生きていた様子わかります。

大木英夫という神学者が書いた「ピューリタン」という本があります。そのなかに、ピューリタン(清教徒)の精神には「行ったら、振り向かず、まっすぐに進むことがある」と述べていますが、それはもちろん信仰をもって行くことです。「行け」と言われて従ったアブラハムの精神です。彼らは、新天地に向かうにあたって、「さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。」(ヘブル人への手紙11章16節)と同じ心を持って歩んだのです。到着した地は何もないと言っても良い。これは患難といえば患難です。耕して収穫を得るにしても数か月はかかるのです。それに耐えさせていただけでいくなかに信仰は深まっていったのです。見える成功を求めていただけなら、失望することばかりだったでしょう。御国にあこがれる希望があったればこそ、彼らは前に向かうことができたのです。

ところが、実際の私たちの生活において、希望といえば見える何かを手に入れることと思いやすい。手に入れば喜ぶし、うまくいかなければがっかりするという構図です。しかし、それでは「この希望は失望に終わらない」という御言葉とは異なってくる。それは元々、希望として見ていたところが間違っていたからです。見えるものが手に入っていないことはつらいかもしれませんが、その「患難さえも喜ぶ」(3節)信仰がなければ、永遠の希望へとはつながらないのです。失敗はチャンスです。それを耐えるきに、練られた品性、そして希望へとつながっていくのです。「この希望は失望に終わることがない」という御言葉を心に受けて、今年の馳せ場を進んでいきましょう。